



JINSHA情報共有会 with C4RAで 目指したいこと 新たな一歩

東京大学リサーチ・アドミニストレーター推進室
特任専門員/東京大学URA
新澤 裕子

Code for Research Administration (C4RA)

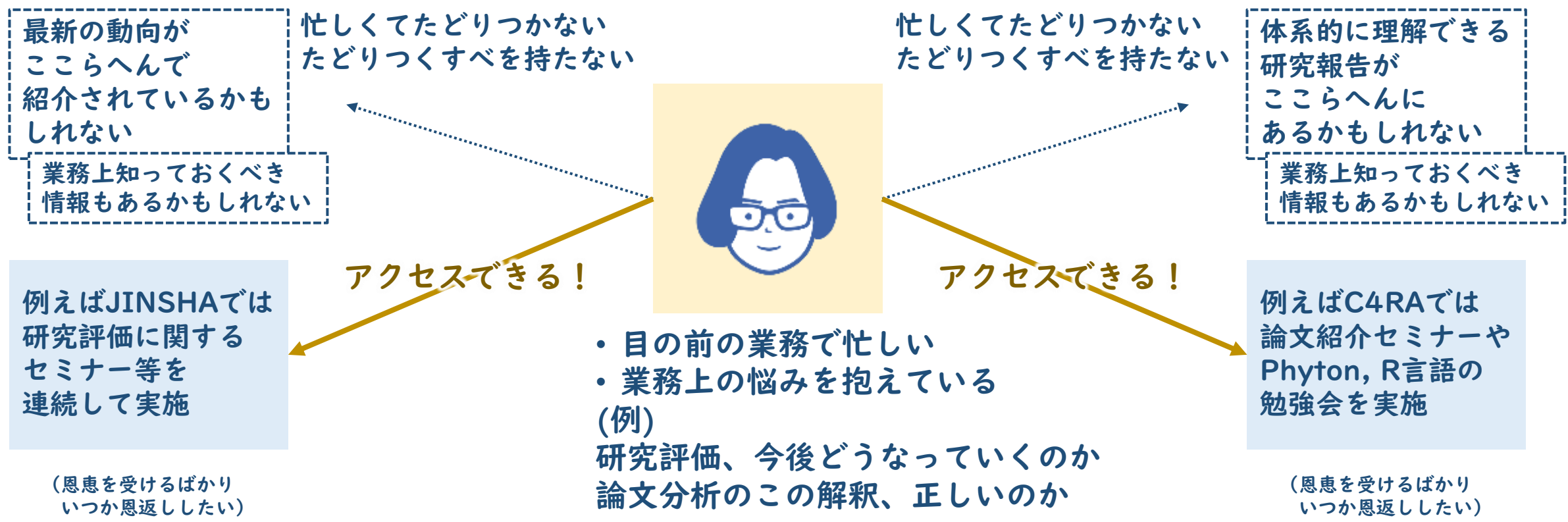
- 研究力分析（研究IR）関係者によるコミュニティ
- 構成メンバーの所属：大学や研究力分析に関係のある組織
 - ✓論文発表状況や科研費の分析は、どの機関でも似ている
 - ✓情報処理に長けた分析担当者が配置されるとも限らない
 - ✓研究力分析業務は大学内で担当者が一人になりがち
 - ⇒ PythonやR等を活用して研究力分析を効率化
- コミュニケーションの仕組み：Slackのチャンネルでの情報交換

参考資料

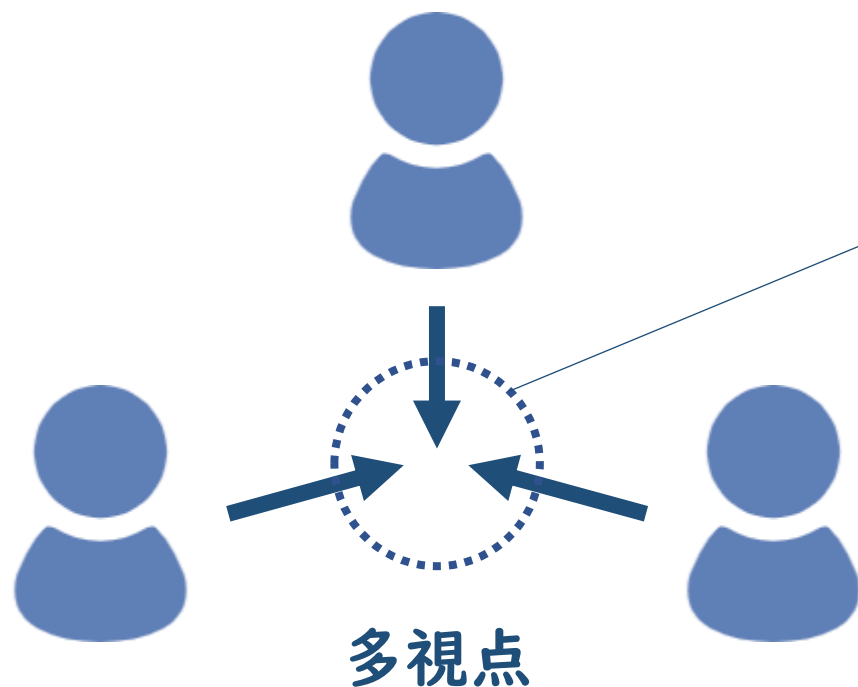
1. C4RAホームページ <https://sites.google.com/view/c4ra/>
2. 研究力分析の効率化・高度化に関するCode for Research Administrationの取組み：URAによる機関を越えた連携.
平井 克之, 岡崎 麻紀子, 奥津 佐恵子, 久保 琢也, 矢吹 命大, 渡邊 優香. 情報の科学と技術 71(2):80-86 (2021)

コミュニティやネットワークの力：集合知

あなたが知りたいことは、誰かも知りたいことかもしれない
あなたが知っていることは、誰かが知りたいことかもしれない

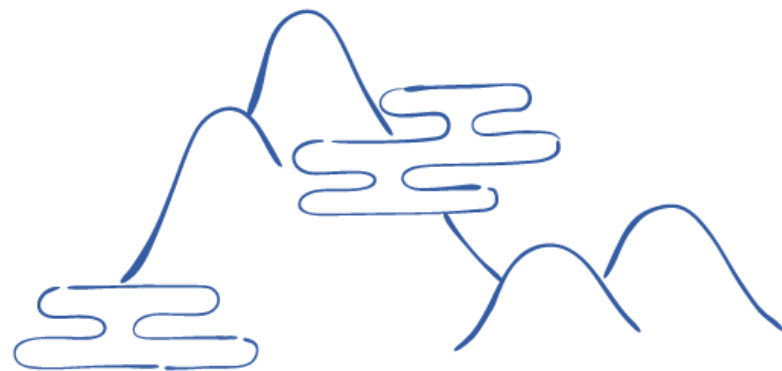


多視点、異なるコミュニティが持つ「知」を集め議論すること

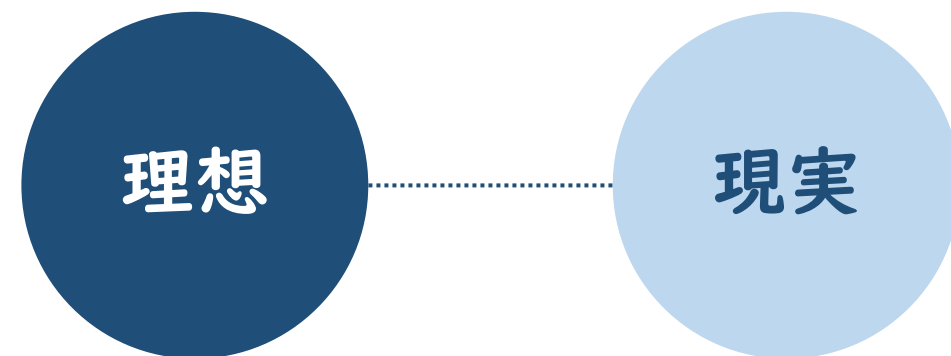


このシリーズで中心にあるのは
責任ある研究評価（の実践）

大事ななのは
「知」を与えられるだけでなく
URA自身が業務に使えるように
自分達の「知」にすること



欧州では動き始めている
日本で
URAができることは？



理想と現実の距離は
遠いかもしれないけれど、
現実を変えるのが
責任ある研究評価の実践
(待っているだけでは変わらない)

責任ある研究評価にURAが果たす役割は……？

思い出される業務の場面……

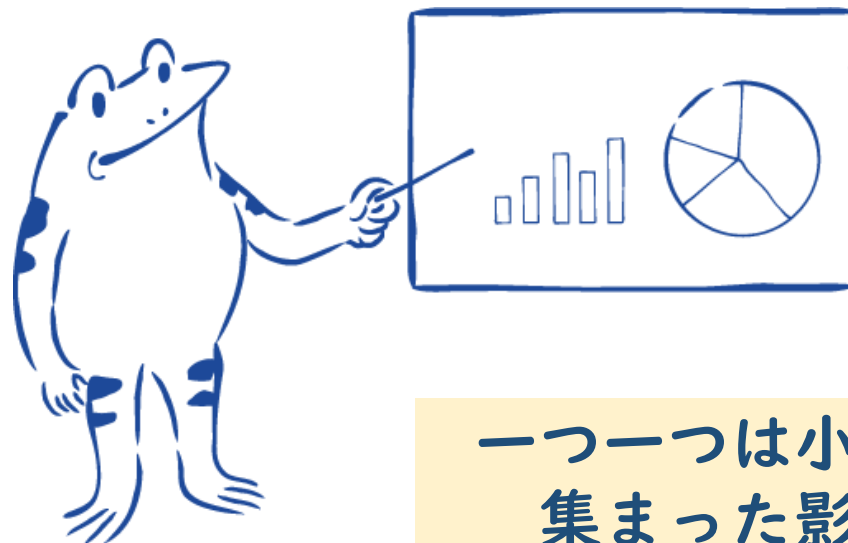
(架空のURAを想定)

Top10%論文というのは、被引用数が多い順番に論文を並べたときに上位10%に入る論文のことですが、引用の傾向が分野によって異なるため、ここでは分野補正の値を使っています。SciValの場合、分野補正の値を使うと、FWCIで並べたときの上位10%論文というのを返してきます。FWCIはさきほど説明した通り、該当論文の被引用数を同じ分野・出版年・文献タイプの論文の被引用数の世界平均で割った値ですが、FWCIの算出に用いられる被引用数は「出版後3年間」のものとなっているため、分野補正をかけたTop10%論文というのは、出版後3年間という非常に短期的な被引用に着目していることになり…

こころへんまでしか伝わらない

⇒文脈が欠如して数字だけ一人歩き (しているかもしれない)

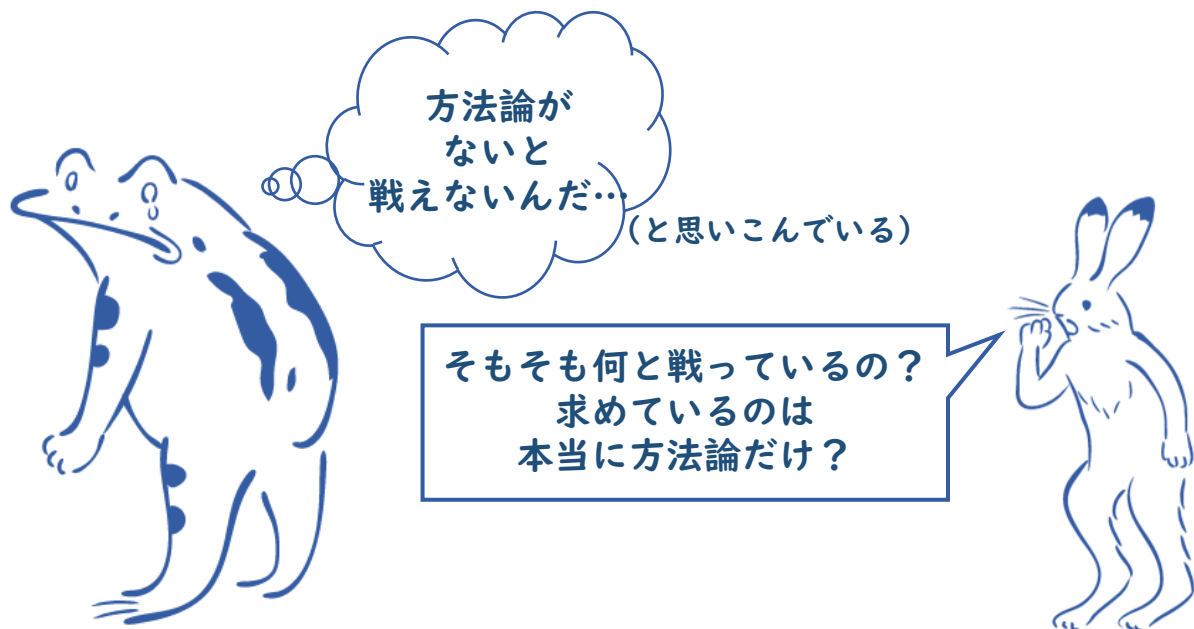
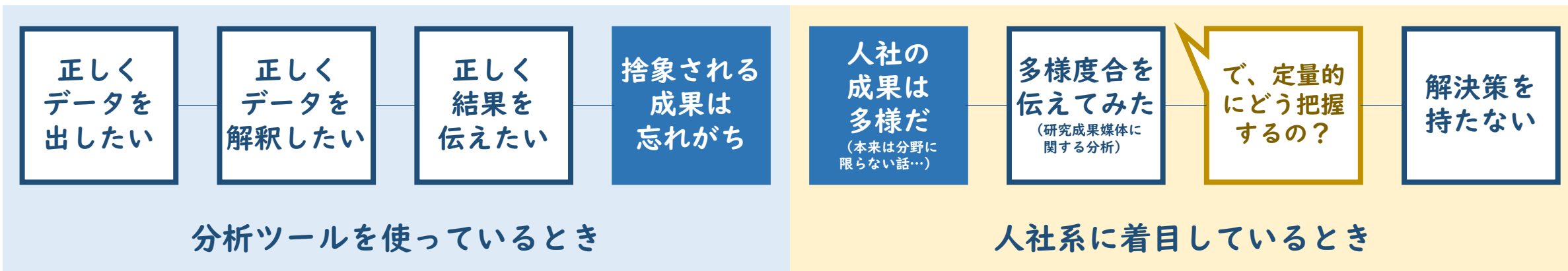
加えてURAに頼めばすぐに数字を出してくれるという認識が定着 (しているかもしれない)



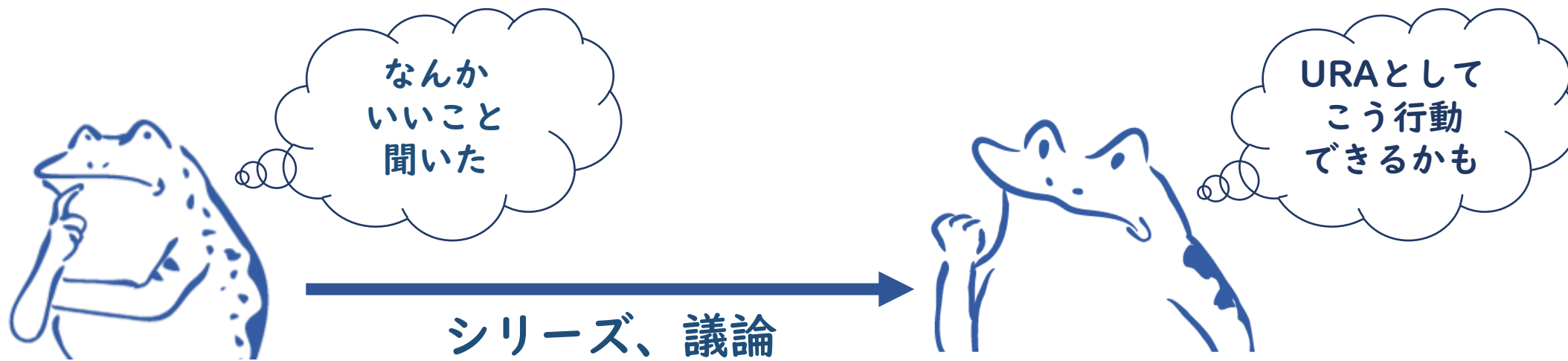
一つ一つは小さいかもしれないけれど
集まった影響力はそれなりにある

皆さんはどんな課題意識を抱えていますか？

例えば…



インプットからRRA実践当事者としてのアウトプットへ



シリーズ、議論
(シリーズをどう設計するかの一
端を担う今日の議論)

アウトプットは多様

- 多面的な分析・方法論
- 適切な解釈
- 適切な報告 (のための関係づくり)
- 学内におけるRRA意識醸成のためのアクションプラン
- 継続的な議論のためのネットワーク
……等



**Responsible
Research
Assessment**

JINSHA + C4RA